

横浜を訪れた海外の植物学者たち

横浜商科大学 久保輝幸

江戸時代

1. 江戸時代に横浜を訪れた出島三学者

① **エンゲルベルト・ケンペル** (Engelbert Kämpfer, 1651~1716)

ドイツ北部の出身。1690年に長崎来港。通詞今村英生の協力のもと調査を行った。1693年3月13日緑と赤の海藻を養殖し加工して売る様子を詳細に記録。

② **カール・P・ツンベルク** (Carl Peter Thunberg, 1743 ~ 1828)

C. リンネの直弟子。1775年に長崎来港。1776年に参内、箱根で採集を行った4月26日午前に鶴見を通過した。江戸では多くの医者が待ちかまえ、薬品や鉱物、植物を持参しツンベルクを訪ね、時に煩わしく感じるほどだったと記す。

③ **フィリップ・F・B・フォン・シーボルト** (Philipp F. B. von Siebold, 1796~1866)

ドイツ南部の出身。1823年に長崎来港し、参内後の1826年5月19日に鶴見や生麦を通過し、各村で昨年の梨が保存され売られる様子や、梨の棚栽培や熊茶屋の様子をみる。再来日後の1861年12月11-12日にも横浜で弟子と面会。

2. “鎖国”日本での植物採集

外国人の自由な往来が禁止されたにも関わらず、植物標本の採集が活発であった理由

- ① 殖産興業と物産学の発展 ② 蘭学・蘭方医の盛況 ③ 日本本草学の成熟

3. 植物学を日本に紹介した蘭学者

津山藩医宇田川家など蘭医や尾張嘗百社の関係者や成員が西洋植物学を紹介した。

- ① 宇田川榕庵 (1798~1846) ② 飯沼慾斎 (1783~1865) ③ 伊藤圭介 (1803~1901)

幕末明治期

1. 明治期の日本人植物学者

- ① 田中芳男 (1838~1916) ② 矢田部良吉 (1851~1897) ③ 伊藤篤太郎 (1866~1941)

2. 開港後に横浜を訪れた植物学者

① **ロバート・フォーチュン** (Robert Fortune, 1812~1880)

スコットランド出身の植物学者。1860年10月に横浜来航。1861年7月6日に金沢村から神奈川に帰った時、その前夜に英国公使を襲撃した東禅寺事件が起きた事を知った。生麦事件の被害者とも面識があったようだ。彼が自著 *Yedo and Peking* に記した “One marked feature of the people, both high and low, is a love for flowers.....” が知られる。



ロバート・フォーチュン



La Japonaise (1876)

② **マキシモビッチ** (Karl I. Maksimovich, 1827~1891)

ドイツ系ロシア人の植物学者。1862年に横浜滞在し、各地で植物採集を行うなか、生麦事件にも遭遇した。牧野富太郎が彼のもとで留学することを試みたことがある。

③ **アーネスト・サトウ** (Ernest M. Satow, 1843~1929)

1862年9月に英国の通訳見習いとして横浜来港、1週間後に生麦事件に遭遇した。サトウは外交官、日本学者としての業績が知られるが、登山を愛し植物採集も頻繁に行った。次男の武田久吉は植物学者となった。

④ **サヴァチュ** (Paul Amedee Ludovic Savatier, 1830~1891)

フランス人医師。1865年6月26日横浜に来航。官営横須賀製鉄所でフランス人技師のための医師として働きつつ、横浜など近隣で植物を採集し、フランスに送っていた。1871年に仏国に一時帰国する前に佐波一郎の協力のもと『花彙』(1759-65)の仏語への翻訳を始めたらしく、1872年に *Botanique japonaise : livres Kwa-wi* として出版した。帰国中、フランチェと共同で『日本植物目録』の編纂を始め、2743種を掲載し出版された。書名に「日本の『草木図説』の版画による植物の鑑定」とあって、飯沼慾齋の『草木図説』を参考にしたことがわかる。

3. 植物分類学の歴史的意義

外交関連の背景

産業革命の影響で安価な綿製品等が日本に流入。

1883 日比谷に鹿鳴館 開館

1894 条約改正により英国の治外法権を撤廃
(陸奥宗光が対露共闘を提案)

1911 小村寿太郎により関税自主権の回復

1919 パリ講和会議 (ヴェルサイユ体制)

① **近代国家の指標**

1854年のペリーの横浜来港で「日米和親条約」を締結。さらに「安政五カ国条約」により国内物価が上昇し、倒幕運動へつながった。明治新政府は欧米と並ぶ近代国家をめざすため科学技術の向上が急務であり、中でも植物学が最も有望であった。

② **標本の所在**

来日した植物学者は採集した標本を欧米に輸送していた。その結果、日本産植物について、基準となった標本を実見したい場合、欧米に渡航する必要があった^(注)。そこで、矢田部らは東大の標本庫充実を図り、同時に日本人が自ら記載することを重視した。

③ **生物学、環境保護の土台**

生物を研究する際、種を特定することは研究の再現性の担保において根拠となるものである。これは諸言語における辞書、歴史学における文献批判と同様に、科学研究の基礎を形成するもので、標本の永続的な保管は欠かせない。

(注) たとえば、ある植物の種について調べたところ、2つのグループに分けられることが判明したときも、それまで基準とされた標本(タイプ標本)とその学名は維持される。もう一方のグループの種に新たにタイプ標本が指定され、新たな学名がつけられる。文字記載では植物の特徴を書き尽くすことはできないので、それはあくまでも補助的な説明文にすぎない。また、当然ながらDNA分析を行う場合も標本は重要である。

牧野富太郎の功績

① 小学校中退の背景

1862年4月に土佐国佐川村に生まれる。1872年の「学制」の発布で小学校が設立開始時期にあたり、小学校入学が12歳。一方で当時の多くの士族層も主に私塾で学んでいた。

② 東京大学植物学教室

1884年、矢田部良吉を訪問し、植物学教室への出入りを許される（なお矢田部は26歳で教授就任、当時まだ33歳の若さであった）。1889年、『植物学雑誌』にヤマトグサの新種記載を行う。1890年、ムジナモの新種記載ののち、矢田部より出入り禁止を告げられる。

③ 植物観察会で普及活動

民間への植物分類知識の普及に尽力した。牧野には各地から標本が送られてくるようになり、その鑑定も行った。1909年に設立された「横浜植物会」に協力し、1911年には「東京植物研究会」（のちの「牧野植物同好会」）を設立した。

なお、1891年9月に南方熊楠はキューバで地衣類の新種を発見。欧米で日本人が新種を発見した最初の例。

横浜の花弁輸出

多くの植物学者が横浜を訪れた一方、貿易商も日本の植物資源に注目していた。

① ジョン・G・ヴィーチ (John G. Veitch, 1839-1870) とカール・クラマ (Carl Kramer, 1843-1882)

園芸商ヴィーチ商会(Veitch Nurseries)の一族、ジョン・ヴィーチは1860年7月に長崎来航し、富士山の植生調査などを行った。同商会の依頼を受け、カール・クラマが1867年に横浜来港し、日本で様々な百合を買い付け。輸出に従事していた。クラマは1876年に東京医学校で植物学を数ヶ月教えたことがある。

② ルイス・ボーマー (Louis Boehmer, 1843~1896)

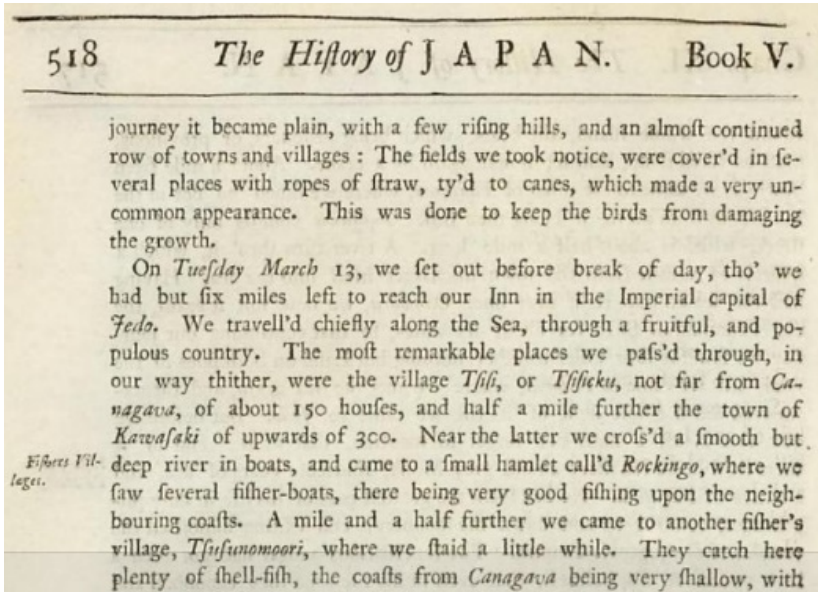
ドイツ北部出身の園芸技師で、1872年3月に横浜来港。北海道でリンゴ栽培などの技術指導や官営ビール工場の設立準備などを行った。開拓使の廃止に伴い、1882年、横浜でボーマー商会を設立し、ユリの球根などを輸出する事業を行った。

③ 鈴木卯兵衛 (1839~1911) と横浜植木商会

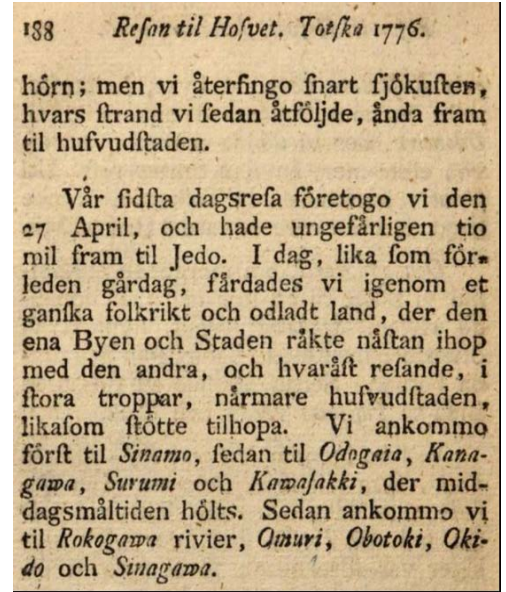
千葉流山の出身で1869年に横浜に移り、栽培技術を学んだのち植木屋として独立した。のちにボーマー商会で買付けを担当するようになり、1890年に「横浜植木商会」として独立した。山手に広大な敷地を有し、文豪の吉川英治はその敷地の裏門近くで育った。

以上、本日は横浜を訪れた海外の植物学者や園芸商が横浜に集結していた歴史をご紹介します。

【参考資料】各植物学者の著述の原典資料のほか、その翻訳書、およびヴォルフガング ミヒェル・磯野直秀・杉本勲・白幡洋一郎・近藤三雄・松山誠・竹中祐典・俵浩三・平野恵・西村三郎・大場秀章・伊藤実・小風真理子・太田由佳らの諸先生の研究成果を参照させていただきました。参照資料が多いため、出典の詳細情報は割愛させていただきます。



ケンペルの記述（英訳が最初に出版された）



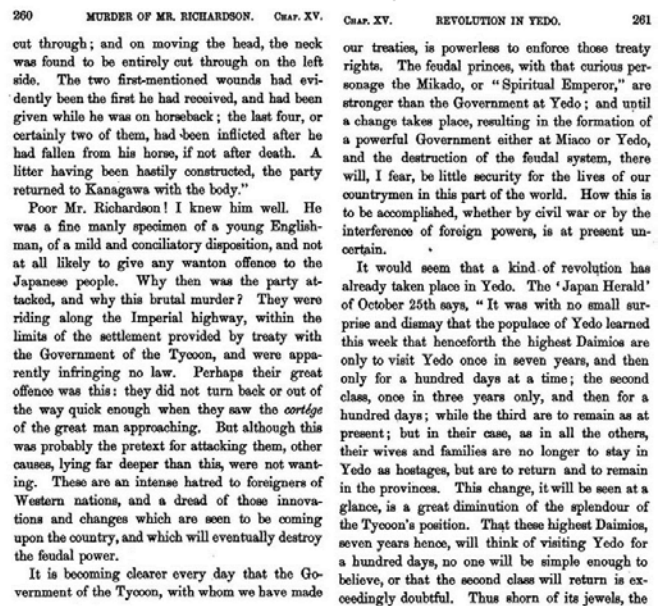
ツンベルクの記述（スウェーデン語）

Tsisicku（新宿）には150軒ほど、Kasawakiには300軒ほどの家があったという。Odogaia, Kanagawa, Surumi（鶴見）, och Kawasakki
ご来場の方より新宿を「Shinsyuku」と読んでいたとの情報をいただきました。



「矢田部」が献名されたトガクシソウの学名 *Yatabea japonica*.
学名の右に命名者として伊藤篤太郎とマキシモビッチの名ある。
『植物学雑誌(Bot. Mag.)』第5巻281ページに記載。
Ranzania japonica のシノニム（異名）であるとされている。

『日本植物目録』は
おとしに第1冊が
、昨年に第2冊がフラ
ンスでリプリントされた。



フォーチュンの *Yedo and Peking* には生麦事件の被害者

リチャードソンについて詳しい記載があり、「かわいそうなリチャードソン、
私は彼のことをよく知っていた」とあり、横浜で交流があったようだ。